第１章　認知症患者における中空視線を利用したコミュニケーションの達成について

藤田ゆりえ
田村怜美

0. はじめに

人の視線には、対象を人とするもの、物とするもの、そしてその対象そのものがないものと大きくわけて 3 つ存在する。人が人と何かを語る際、この 3 つの視線は会話というコミュニケーションの中に多分に盛り込まれる。そしてそこには、ある程度の規則性が存在している。例えば、「話し手が受け手を見ているとき、受け手は話し手を注視しているべきである。また話し手が話し手を見ていない受け手を見つけたとき、これはルールの違反行為となり、彼らはしばしば会話の休止や再始動といった会話の中断を起こす。」(Goodwin,1984:.230)しかし前述の視線の規則性（「通常の状態」）は、会話場面においてしばしば確実に達成されるものではない。話し手が受け手に視線を向けても、受け手が話し手へ視線を向けていないことは行動レベルにおいて度々起こりうる。そこでその時、話し手側はあらゆるテクニック（会話の中断、復唱、中空視線等）を用いてこの「通常の状態」を回復する。

ここで我々が注目したのが、その話し手側のテクニックのひとつとして見受けられるとした「中空視線」についてである。中空視線とは、視線の先に対象がない状態の視線であるが、この中空視線とは一体何を意味しているのだろう。聞き手の視線を話し手へと向けさせるためのツール、発話権の継続としてのツール、想起としてのツールとその内容は様々だ。

ところで、この「中空視線」というテクニックは、いわゆる健常者に限られたコミュニケーションツールではない。認知症者にとっても、会話という対人コミュニケーション場面においてはあらゆる場面において利用されているが、しかし健常者が使用するそれとは違い、このツールを例えば想起の意味を含んで認知症者が使用する際、会話のトラブルが発生する恐れがある。なぜなら会話とは、前提として自らの経験を参照した発話によって行われているからである。しかし「痴呆を病む人は経験したことの内容を忘れるだけでなく、経験したこと自体を忘れる」(小澤:2003,3)、つまり認知症者は経験を参照した会話（発話）能力が乏しい。そのため会話テクニックとして、想起の意味での中空視線を利用したとしても、結果として想起に失敗するということが起こりうるのだ。

今回実習で訪れたグループホームでの利用者との会話において、中空視線は語りのあらゆる場面で見受けることができた。本調査では、以下 2 節で記したグループホーム利用者 A、B への聞き取り調査から得られたトランスクリプトにおいて、会話というコミュニケーショ

ンを介して認知症者が「中空視線」を利用している様子が見受けられたことから、認知症者による「中空視線」を用いたコミュニケーション（会話）の達成はいかにしてもたらされるものなのかを中空視線使用の意味とともに考察していくことを目標とする。

1. 発話主導権継続としての中空視線と場面参与者の代理発話

〈断片 1〉 ウイスキー

日時：2009 年 7 月 27 日 08:41～

場面の参与者：教員 K、学生 T、F、入居者 A

◎場面の説明

旦那さんがお酒を飲むのかという質問に対して A が非常によく飲むと返答。その後飲むお酒の種類について話す場面。

入居者 A

学生 T

教員 K

学生 F

▽8：41：31

写真 1　ウイスキー

01K　いや：：ウイスキーは、じゃあ日本のウイスキー？外国のウイスキー？

02A　え、あのいや、見てごらん。

03K　　はい。

04A　ダルマいうのがあるで[しょ。]

05K　　[ダルマは]サントリーですね。

06A　うん

07K　君たち知らないかな。あ：：

08F　　ちょっと分からないですね。

09K　ダルマですよね：：

10A　うん（(うなずき)）

11K　ね。私は存じております。サントリーですよね。
12A　は。サントリーはね。あの頃はね。安う(※1)して倹約する人はね、角瓶[飲ん]でたの。
13K　　[角瓶。]
14A　ね。
15K　そうです、はい。
16K　あの、透明の瓶に茶色い液体[が入ってて]
17A　　[こうキラキ]ラキラー
18K　四角い、えぇキラキラキラって。←写真１
19K　あの四角いのがこう縞模様が入ってて瓶、角瓶ですよね。
20A　あれ、私見たらぞっとしてた。
21K　　あ：：。
22F　あ：：。
23K　飲むから、旦那さんが。あ：：。
24A　もうねぇ、体壊しゃ[しないかと。]
25F　　[あ：：。]
26T　　[あ：：。]
27A　ほでも(※2)まだ長生きしてるんだからね。
28K　　あ：：。
29A　そ：と思うよ。ね、お酒がどうこう言うこともない。
30A　だけど、痴呆症になったっていうのは
（2.0）
31A　やっぱりお酒関係してるんじゃないかと思う[のよ。]
32K　　[い]ろんな説がありますよね。
33K　アルミニウム説もありますし、えぇ分からないですね。
34A　　うん。
35K　あのお酒もよくないかもしれないし、　ええ。
36A　ねぇ。
37K　　分からない。
38A　と思うねぇ。

※1：安う→安く
※2：ほでも→それでも

1-1. Ａの物語会話におけるメイン参与フレーム・サブ参与フレーム

まず断片１の考察に移る前に、「参与フレーム」Goffman（1974,1981）について触れておきたい。「参与（participation）」という概念を、相互行為の分析の中心に据えたのは、Ｅ.

ゴッフマンが初めてではないかと山崎敬一（1997）は指摘する。ゴッフマンによれば、会話において発話の受け手には、単純に聞き手として発話場面に参加している者だけでなく、それ以外の役割で場面に参加している者がいるという。

ゴッフマンは、受け手と一口にいってもいろいろな受け手がいることに、注意を促している。たとえば、直接語りかけられている者もいれば、その発話を単に傍らで聞いている者、さらに話し手（及び他の受け手）に気づかれないようなしかたで聞いている者（盗み聞きをする者）もいる。そこに居合わせている（話し手以外の）人びとは、そのつどの発話にたいして、さまざまな水準の受け手として関係している。そのつどの発話にたいする受け手の布置のことを、「参与の枠組み（participation framework）」と呼んだ。（西阪、1997：18）

つまり、会話における「参与フレーム」とは発話者の発話を受ける、聞き手はもちろんそれ以外の様々な受け手の場面内での配置のことを指している。

この断片 1 の場面で起きていることは、上記の「参与フレーム」の構造であり、かつ「サブ参与フレーム」というもうひとつの枠組みが会話構造の中で見受けられた事例である。

以下〈断片 1-a〉ではその場面のトランスクリプトを動作と視線を併せて記載した。

（断片 1-a）：断片 1 における 04-09 行目

本トランスクリプトは、視線・発話・振る舞いを同時平行的に記しており、また〈断片 1〉では表記されていない発話者以外の場面参与者のその発話時点での様子も併せて表記してある。（※2-1 についても同様形式のトランスクリプトを使用。）また区切り線の上段の右端と下段の左端は時間的に継続しているものとする。

※視線表記	
A→入居者 A	F→学生 F
K→教員 K	メ→メモ
T→学生 T	空→中空視線

```
        KKKKKKKKKKKKKKK
04A     ダルマいうのがあるで[しょ。]
        ((ダルマの形を手で表現))
                                AAAAAAAAAAAAAAAAA
05K                             [ダルマは]サントリーですね。
                                  ((                うなずき))
          (     省略     )
```

F　　（　　）
　　（（　省略　））
　　メメメメメメメメメメ AAAAAAAAAAAAAAAAAA
T　　（　　）
　　（（　　頭をあげ A をみながら首をかしげる））

　　KK
06A　うん
　　（（うなずき））
　　TTTTTTTTTTFFFFFFFFFF
07K　　君たち知らないかな。あ：：。
　　（（　　））
　　KKKKKKKKKKK
T　　（　　）
　　（（首を振る　　））
　　KKKKKKKKKKKKKKK
08F　　ちょっと分からないですね。
　　（（　　））

　　AAAAAAAAAAA
09K　ダルマですよね：：
　　（（　うなずき　））

〈1 - 1 考察〉

ここでの語りは、会話骨子が A による想起中心に行われていることから「昔語り」であるといえる。そもそも「昔語り」とは話し手を中心に話を進めていくものであり、発話の権利は話し手に独占的なものであるから、断片 1 での「メイン参与フレーム」は、A を語り手に教員 K と学生 2 人を聞き手とする枠組みであるといえる。しかしながらここでは 07-11 行に見られるように教員 K による挿入連鎖が起こっている。これが断片 1 における「サブ参与フレーム」（※3）である。会話規範において発話者はその会話内容における聞き手の理解を把握する必要があり、（ここでは「ダルマ」）それを達するために、教員Kによって A の発話を代理することが行われている。つまり「サブ参与フレーム」としてこの場面で見られるのだ。

更に断片 1 の 11～18 行にあるようにここで教員は自らがその問い（ダルマについて）の答えを知っているにも関わらず、「知らない」と答えた学生 2 人に対しての回答は行わなか

った。これは「昔語り」というこの場面での発話の権利が潜在的に A にあることを示す出来事であり、また「知らない」と答えたにも関わらず問いを立てた教員に対して回答を求めなかった学生 2 人に対しても同様である。これはが「物語は話し手が語り続けることができる」(Harvey Sacks：1995) と述べていることからも、ここでの聞き手 3 人による行為は適切であり、前述したことを潜在的に理解していたと推測される。

これらのことから (断片 1-a) 場面の形成は、話し手である A 独自に行われたものでなく、「代理発話」を行った教員 K 及び聞き手である学生 2 人によるサポートが合わさったものであるといえるであろう。

※3：サブ参与フレーム→メインの参与フレームの時間枠の中でその中断中にメインの参与フレームに戻ることを前提にできあがる短期的な参与フレーム

1-2. 会話の主導権継続を示す中空視線

（断片 1-b）：11-14 行目

AAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA
11K　ね。私は存じております。サントリーですよね。
((　うなずき))
KKK 空空空空空空空空空空空空空空空空空空空空空空空空空 KKKKKKKKK
12A　は。サントリーはね。あの頃はね。安うして倹約する人はね、角瓶[飲んでたの。]
((顔を少し上げる　手振り　K へ軽く身を乗り出す))
(　省略　))
F　(　)
((　省略　))
(　省略　)
T　(　)
((　省略　))

AAA
13K　[角瓶。]
((顔をあげる))

KK
14A　ね。
((うなずき　手は挙げたまま))

〈1-2 考察〉

ここで A に見られる中空視線（12 行）は発話権の継続を、他の場面参与者に対し要求す

るとともに表していると推測される。上記〈1-1 考察〉で述べた通り、断片 1 における「参与フレーム」は「メイン参与フレーム」と「サブ参与フレーム」の 2 つの構造で成り立っているが、（断片 1-b）の 12 行で起こっていることは（断片 1-a）で発生した「サブ参与フレーム」から「メイン参与フレーム」への引き戻しである。したがって（断片 1-b）12 行に見られる A の中空視線は教員 K による「代理発話」の終了を表しているものであり、同時に A 自身の「会話の主導権継続」を表していると考えられる。

2. 想起としての中空視線と参与者によるサポート

〈断片 2〉起床時間

撮影日時：2009 年 7 月 27 日 08:00～

場面の参与者：学生 S、入居者 B

◎場面の説明

学生がどこから来たのかという話題から、学生の当日起床時間についての話題へと発展。後に入居者の起床時間についての話題へと転換するシーン。

▽8:00:14　写真 2　起床時間

01S　朝 6 時半、朝 6 時、5 時過ぎに起きて　　来ました。

（2.0）

02B　まだ寝よっただろうわぁ。

03S　寝よった？そう眠たくて。　　朝早かったんで。

（8.0）

04B　何時起きになるんだろう。7 時 9 時。　　←写真 2

05S　いつも何時くらいに起きられるんですか。
（3.0）
06B　何時くらいって言われたって。　　よう分からん。
07S　HaHa：：：

上記断片 2 における「中空視線」場面は 04､06 行における B の発話中に見られる。ここで発話者 B が用いた「中空視線」の意味は、自らの経験を顧みる想起であり、会話における典型的な経験参照型であるといえる。ではこの会話達成はいかにして成し遂げられているのか。

以下（断片 2-b）では、1-1、1-2 と同様に、この場面で中空視線が用いられた 03-07 行についてを、視線と動作が同時に表示されるトランスクリプトにより示した。

（断片 2-b）：03-07 行目

※視線表記 B→入居者 B　　S→学生 S 空→中空視線

BBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBB
03S　寝よった？そう眠たくて。　　朝早かったんで。
((　　うなずき　　))

SSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSS
B　(　　)
((手を口元にあてたまま))

（8.0）

空空空空空空空空空空空空空空空空空
04B　何時起きになるんだろう。7 時 9 時。
((手元にあてていた手を少し離し、顔を上に向ける))

BBBBBBBBBBBBBBBB BBBBBBBBBB
05S　いつも何時くらいに起きられるんですか。
((　省略　　))

（3.0）

空空空空空空空空空空空空 SSSSSSSSSSSSSSSSSS

06B　何時くらいって言われたって。　　よう分からん。

((　　))

SSSSS

07S　HaHa：：：

〈2 考察〉

この学生とのコミュニケーション場面において、上記 04、06 行からもわかるとおり B は中空視線を利用した会話に挑戦している。しかし同時に想起の失敗による会話のトラブルも起こっている。そもそも 04 行において、B は自己の起床時間を提示するという形で学生との「起床時間」についての話題を継続しようと試みている。ところがまさにその場面において B は自らの起床時間についての想起に失敗している。

そこで注目すべきはその後の学生による発話である。「いつも何時くらいに起きるのか」というこの発話は、問題となっている「その日」の起床時間についての話題を逸脱せず、且つ B の想起の助けとなりうるサポートとなる発話であることがみとめられる。つまり、「今日」という特定された日の具体的な出来事に対する想起は困難であっても、習慣的には何時ごろ起きるのか、という問いに対しては答えられるのではないかという思惑がこの発話には意図されていると考えられる。ところがここでも、B は 06 行に見られるように想起に失敗してしまう。しかしながら 06 行後半に見られるとおり、B によって想起が失敗したことを告げる「わからん。」という発話が起こったことは、一見して会話の流れとして失敗したように見えたとしても、実際は想起に失敗したことで起こる会話中断というトラブルを回避することに成功していることを表しているのではないだろうか。

これにより、学生による 05 行の発話はあくまでも B との会話継続のためのサポートであったことを窺い知ることができる。

3. 総括

『認知症者による「中空視線」を用いたコミュニケーション（会話）の達成はいかにしてもたらされるものなのか。』という疑問から、今回の検証を行ってきた。それによって「中空視線」は単独でそれ自体に意味があるのではなく、あらゆる相互行為と場面の特徴によって意味を持つものであることが分かった。また認知症の症状の影響があるか否かに関わらず、断片 1 にある物語方式や断片 2 のように会話中に想起が含まれるといった場面の形成に成功しているのは、入居者とのコミュニケーションの連鎖的関係に基づいたものであると考えられる。つまり会話とは語り手単独によって成り立たっているのではなく、聞き手による様々なサポートや語り手自らが潜在的に持つ会話のテクニック（中空視線等）が

相互に作用し合うことによって形成される相互行為場面であるといえる。

最後に、今回の報告書執筆にあたり、貴重なお時間を割いて私どもの調査事例の検証に参加しご協力くださった、信州大学医学部井口高志氏と京都大学大学院文学研究科行動文化学専攻木下衆氏、また調査協力の依頼に応じてくださったグループホーム B の関係者の方々、入居者の方々には深く御礼申し上げたい。

参考文献・引用

Charles goodwin（1984）「Notes on story structure and the organization of participation 」University of South Carolona,Columbia

ハーヴィー・サックス（1995）「会話データの利用法　会話分析事始め」『日常性の解剖学』マルジュ社、92-173

葛岡英明・水川喜文・三樹弘之（1995）「CSCW 研究とエスノメソドロジー研究の接点」『現代社会理論研究第 5 号』現代社会理論研究会

西阪仰（1997）『相互行為分析という視点　文化と心の社会学的記述』金子書房

西阪仰（2008）『分散する身体　エスノメソドロジー的相互行為分析の展開』剄草書房

山崎敬一・西阪仰編（1997）『語る身体・見る身体〈附論〉ビデオデータの分析法』ハーベスト社